Vol.00

新しい知と新しい美の地平をひらく

アートミーツケア学会
News+Letter 準備号

現代社会が大きく変動するなか、医療や福祉、教育、コミュニティなど人間の生を支え、育む場もまた大きな変化の時代を迎えています。人間が人間を求める「ケアの時代」にあって、幸福とは何か、豊かに生きるとはどういうことか、ということが問われはじめています。一方、芸術の分野においても特権的なものではなく、人間にとって、社会にとって必要な芸術のあり方が問われています。

このようななか、私たちは人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、また人間を幸福にし、人間の全体性を恢復していくためのアートの力を社会に生かしていくためのネットワークとして「アートミーツケア学会」を設立することになりました。分野や立場を超え、さまざまな人たちと新しい知と新しい美の地平をひらき、人の生きやすい社会、文化を提案していきたいと思います。

講演録

アートミーツケア学会設立発起人会
記念講演会「生命・アート・社会」
鷲田　清一（大阪大学教授、副学長）

2005年12月20日、全国から160人が集まり、設立発起人会を開催。記念講演会には、会長に就任予定の鷲田清一さんが「生命・アート・社会」をテーマに講演を行いました。

変える

── アートとケアをつなぐキーワード ──

芸術はあなたを変えることがあります。
あなたが芸術を変えることがあります。

これは、以前たんぽぽの家が催した、エイブル・アート・パビリオンというプロジェクトのパンフレットにあった言葉です。私はこの「変える」という言葉を見たとき、20世紀前半に一世を風靡したシュルレアリスムの標語になっていた“Changer la vie”（生活を変える、あるいは生を変える）という言葉をふと思い起こしました。

限界（リミット）を超える行為

今日はアートとケアの結びつきということについて、今のアートシーンで目立つ２つの点からお話しさせていただきたいと思います。ひとつはまず、アウトサイドとインサイドの関係。そしてもうひとつは、アートがどうしてコミュニケーションの媒体になれるのかということです。

アウトサイドとは直訳すれば、外側、外部ということですが、とくにヨーロッパの思想や芸術の歴史をみたときに、多くの場合、意識や視野の外部にあるものがアウトサイドとされてきました。たとえばカール・マルクスがいったプロレタリアート（無産階級）、フロイトのいった無意識、ニーチェが発見した狂気、ヨーロッパの人類学者たちが発見したアフリカという存在、アール・ブリュットという芸術運動、など。アウトサイドとは、私たちが意識しようとしても意識のなかに入ってこないもの、あるいは見ようとしても見えないもの、見えなくさせられているもの。そういうものを発見し、そこに視点をおいて、今私たちが意識しているものを大きく組み替えていくというムーブメントです。

芸術の場合で考えると、インサイドとして共有されているのは、今の私たちがアートに触れるときに固定観念になっているような考え方です。たとえば「オリジナリティ」という考え方や、作品に主題を見てとらないといけないという強迫観念、「鑑賞」をめぐるさまざまの制度など。そういう視点からいうと、20世紀というのは、インサイドが純化されていくと同時に、どんどん壊されていくプロセスでもありました。

もう２，３年前になりますが、舘野泉さんというピアニストが、いずみホールでコンサートをされたことがあります。舘野さんは脳溢血で半身不随になられて、一時はピアノ演奏を断念されましたが、やはりどうしても演奏したいということで、今は片手で演奏をしていらっしゃいます。

私は最初、つい先入観でいろいろ考えてしまったのですが、目をつぶって聴いていると、片手で弾いていることが、わからないような演奏でした。そのときに思ったんです。彼にとって、使える指が５本しかないというのはリミットです。今まで10本あったのに５本でしか弾けなくなったというのは、彼にとって新しいリミットで、もうどうしても超えられないリミットです。

でも、よく考えると、私たちも10本でしか弾けないというリミットを持っているわけです。あと10本指があったら、またぜんぜん違う世界ができてしまう。それはちょうど、私たちがいくら空を飛ぼうと思っても、絶対飛べないリミット。あるいは、もう息なんてやめてしまおうと思っても、どうしても息つぎをしないと生きていけないというリミット。そのリミットの中でリミットを超えるような新しい価値を生み出していこうという営みと何も変わらないというふうに思ったのです。

私は、アートというのは、人が、ある限界の中で、その限界を一瞬超えるような、そしてその限界の外側にある、ある別の次元－価値の次元－を私たちの目に見える形で示してくれるものなのではないか、と思います。そういう意味では、あらゆるアートは、私たちが意識している、あるいは私たちに見えている限界の外側に触れる行為だというふうに思うのです。

かけがえのない／大勢のなかの私

つぎに、コミュニケーションとしてのアートや、ボランティアを巻き込むアートという視点から、私たちにとってアートとは何かを考えてみたいと思います。

私は一昨年、湊町アンダーグラウンドプロジェクトに参加しました。難波の湊町に、地区の開発計画の中でショッピングアーケードとして構想されながら、バブルが弾けて未完のまま封印されていた、幅20～30m、長さ200mの地下空間があり

ます。それをあるアートプロデューサーが発見して、コンセプトを作り１年半かけて光のアート展というのを実現しました。

そこに集まってきた人は、いろんな人がいたのですが、全員ボランティアでした。管理者であるJRの同意を取りつけることからはじまり、消防署との対応や、いろんな法律をクリアしないといけないときに、ボランティアの弁護士さんが本当に力になってくれたし、ある作家は、その地下空間をコンビニと同じ明るさにするためには、蛍光灯が何本必要かを計算し、さらにそれを何人ものボランティアたちが関西一円からタダで集めてきました。みんなでメールで連絡しあい、広報、経理担当、事務連絡、みんな手弁当でやりました。最終的には何百人という人たちが集まりました。

そのボランティアの人たちはアーティストではないんです。でも何か普段と違うことができる、普段とは違う自分に出会えるかもしれない、あるいは普通だったら絶対会えないような人に会えるかもしれない、いろんな思いがあったと思うのです。とにかくどんどんどんどん人が集まってきたわけですね。

そのとき私は、この力っていったい何だろう、どうして仕事だったらいやなのにボランティアとしてだったらこんなに人が集まってくるのか、それが不思議でなりませんでした。

このイベントが終わった後、私は印象に残るアーティストの言葉に触れました。その人は光のアートで有名な若手の作家ですが、雑談していたときに彼がボソッと「自分はここでは作家ではなかった。アーティストではなくて、１スタッフでした」と誇らしげに言いました。このことは、とても大きい意味を持っていると思います。

つまり、これまでのアーティスト観では、自分の独創性やオリジナリティの成果を強調するのに、このアーティストは正反対のことを言いました。自分はone of themだったということを誇らしげに言う。私はこれが、市民としてものすごく大きな成熟だと思います。

自分にしかできないものを手に入れるのが成熟なのではありません。これは精神科医の中井久夫先生の書き物から教わりました。彼はunique Iという言い方をするんですが、自分がかけがえのない、変わり身のきかない１人の自分であると同時に、大勢のなかの１人－one of them－である。こういう矛盾の上に安心して乗っかれるようになった時、人が成熟したというのだといっています。

そういう意味で、たぶんこのアーティストは、このイベントをきっかけに市民としての成熟を強く意識しました。彼自身が変わっていったのだと思います。

また、若い人にとっても、誰にでもできることかもしれないけれどもここで自分が身を引くとプロジェクトが回らなくなるというような実感を持ってある活動ができたということ。その人たちはアートに興味はなかったかもしれないけれど、アートの活動を通してone of themとしてボランタリーに関わったということが、中井先生のおっしゃる成熟の機会だったのではないかと思います。

人として何かをつくっていく力を取り戻すレッスン

今の世の中、とくに若い敏感な人は、自分という存在が社会のなかで浮いている、泳がされているという感覚がぬぐいきれないのではないかと思います。浮いているというのは、自分がどうしてもここにいなければいけない理由、あるいはいていい理由を確信しえない。会社に行っても、学校に行っても自分がここにいなければならないと実感できない。

泳がされているというのは、自分のしたいことが分からない、自分がしたいと思っていることと、したいと思わされていることの区別がつかない。高度な消費社会のなかで、自分で選択したと思いながら、本当は選ばされているだけにすぎないのではないか、というような感覚です。

ボランタリーな行為というのは、浮いているのではなくて、泳がされるのではなくて、もう一度自分で泳いでみよう、自分でもぐってみようという行為なのではないでしょうか。

青木淳という有名な建築家がいます。彼は建築には２種類あるといっています。遊園地としての建築と原っぱとしての建築。彼がここで対比しているものは何かというと、遊園地というのはあらかじめそこで行われることが決まっている場所。原っぱというのは、人がまず集まってそれから集まった者どうしが何をして遊ぶかを決める場所です。行為を通じて人と人の結びつきができていく、そこで行われることが空間の中身をつくっていくということです。

ボランティアが関わって都市のいろんな空間で行われるアート。まさに原っぱに集うようなものじゃないでしょうか。美術館ではなくて、それはアートにとっての原っぱです。そして、アーティストもone of themとして関わって、何かが現れる。それはもののかたちとしてだけではなく、出来事として起こる。

大事なことはそれを自分たちでやったということ。官にゆだねるのではなく、民の１人として、人として何かをつくっていく力を取り戻すレッスンになったということではないでしょうか。

ケアとアートが関わるのもこのところじゃないかと思います。ケアは人の生活、ふるまいを支える。ケアというもののなかで、私たち自身が生活を変えていくような出来事が必ず起こります。「変える」ということがアートとケアをつなぐキーワードになると思います。

（大阪府立文化情報センター【ほっとなにわ塾】さいかくホールにて）

鷲田清一さんプロフィール

現象学の視点から、身体、人称、規範、所有、顔、ケア、モード、国家などの問題を論じる。近年は、看護・介護や教育などの現場に哲学をとおしてかかわる〈臨床哲学〉のプロジェクトに取り組んでいる。

著書に『〈想像〉のレッスン』『「弱さ」のちから』『「聴く」ことの力』など多数。

アートミーツケア学会　役員（案）

（敬称略）

■会長	鷲田清一（大阪大学教授、副学長）
■副会長	畑祥雄（関西学院大学教授）
■常務理事	播磨靖夫（財団法人たんぽぽの家理事長）
■理事	秋田光彦（大蓮寺住職、應典院主幹）
理事	片井修（京都大学情報学研究科教授）
理事	グロッセ世津子（有限会社みどりのゆび代表）
理事	塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究科助手）
理事	関口怜子（ハート＆アート空間Be-I代表）
理事	ブルース・ダーリング（九州保健福祉大学教授）
理事	銅金裕司（メディアアーティスト）
理事	鳥海直美（千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科専任講師）
理事	中川真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
理事	並河恵美子（NPO法人芸術資源開発機構代表）
理事	本間直樹（大阪大学講師）
理事	的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
理事	見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事	森口ゆたか（NPO法人アーツプロジェクト代表）
理事	森田ゆかり（金城大学短期大学部講師）
理事	山口悦子（大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学・教員）
理事	横川善正（金沢美術工芸大学教授）
■監事	太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事	三浦久子（株式会社エイジレスラボラトリー会長）

設立発起人よりメッセージ

（敬称略）

秋田光彦　浄土宗大蓮寺住職・應典院主幹

日本人にとって、アートとケアの出会いは仏教を抜きにして語ることはできない。日本の仏教は「いかに死ぬか」を究極まで問い詰め、その応答として様々な哲学とともに、儀式や装置が開発された。それは「生と死の芸術化」といっても過言ではない。いまは古びてしまったように見える日本人と仏教の関係を、アートとケアの観点から捉えなおす価値は小さくないだろう。生を絶対肯定していくだけでなく、死を見据えて生きることの哲学とその表現を、いっしょに学んでいきたい、と思う。

イダヒロユキ　立命館大学非常勤講師・日本女性学会幹事

私は「あらゆる人がアーティストに！」を少しでも実現に近づけられたらと思っています。そのためには、短く働いて、少ない収入でも何とか楽しく暮らす、という技を多くの人が鍛えていく必要があると思います。そうしたゆとりあるスローな生活をお互いがしていくことで、新たな係わり合い方、すなわち「ケア」もまた生活に根付いていくように思っています。

伊藤裕夫　静岡文化芸術大学文化政策学部教授

「芸術と社会をつなぐ」という観点からアーツマネジメントを研究、かつ実践するなかで、常に念頭に置いていることは、いかなる社会と芸術は出会い、そして「つながる」ことで社会も芸術もどう変容していくか、ということです。「ケア」との出会いにより、芸術と社会がいかに変容し、またアーツマネジメントもどう変身を遂げるか、コミットするなかで見守っていきたいと思っています。

岩下徹　舞踊家

「即興ダンスの力」即興ダンスを御覧になって、また実際に踊って頂いて、『元気が出た！』とのお言葉を頂くことが有ります。即興には私達のなかから原初的な<生>を呼び起こすような力が潜んでいるのかも知れません。癒されることよりも癒えることを促すような野性にも似た力が。以前幾度となく一緒に踊って頂いた、或る統合失調症の患者さん。踊っていらっしゃる時の彼は、私達の世界と辛うじて繋がっていられたように思います。それは確かに所謂「普通のダンス」のイメージからは程遠いものだったかも知れませんが、本当に彼にしか出来ないダンスだったと言えます。交換不能の身体による再現不能の出来事。誰のなかにも即興は秘められているのです。

梅澤啓一　立正大学教授

大学院で「感性福祉論」という新たな研究分野が設置され、この四月から講じます。感性発達は幸福に生きることといかに連関し合うか、生涯を通じての感性発達のメカニズムはいかなるものか、保育・教育・生涯学習・社会教育・地域や社会におけるアートを中心とした人間的活動の内容と方法は、感性発達に即 していかに体系化されるか、などの問題について考えていきます。これにぴったり合致した本学会に大きな期待を寄せております。

片井修　京都大学情報学研究科教授

アートやケアに関わる活動は存在者と共にありその存在を深める営みとして掛替えのないものだと思われます。細分化され専門家化された学術や技術に代表されるように、我々の存在の在り方は今や分断化され、生命が本来有している深みや奥行きと豊かさを失ってしまっているようにも思います。この人間性を欠いた社会や生活の在り方に変革をもたらし、再び生命観や統合性を蘇らせるような活動の展開を期待しております。

栗原彬　政治社会学者

「人間の領域を取り戻そう」

いま、新自由主義の政治と地球化システムが貪欲な資本主義と強権的な市場原理と「帝国」支配を推し進めた結果、優勝劣敗と社会の分裂と協同体解体を地球上の至る所に導き入れて、不安と不信と悲惨を増殖しています。協同性と「信」の回復の可能性がわずかに残されているのは、いのちの根につながるアートとケアの領域だけでしょう。アートとケアが出会う場を広げ、その２乗する生の力で、人間の領域を取り戻していきましょう。

グロッセ世津子　有限会社みどりのゆび代表

私たちは、私たちなりの花を咲かせる情報をすでに持って生まれたひとつぶの種。生きるということ＝種の情報開花は、表現されてかたちになる。物語になる。そう、生きることはアート。アートとケアが出会うとき、私もあなたも創造的存在として「ある」ことから始まる、いのちの原理に祝福された関係性が可能になる。「あなたのため」「私のため」から、「お互いのため」への扉が開く。

塩瀬隆之　京都大学大学院情報学研究科助手

異なる価値観をもつ人が一堂に会する場所、そこは新たな価値に出会う期待と同じくらいに異なる価値同士のせめぎあいに苦しむ不安が生まれる場所でもあります。そんな出会いの場所でなすべきは、価値観の異なる相手を敬うこと、自らがただ相手にできることの全てを尽くすことに他なりません。わたしたちが「ケア」という言葉の意味にまっすぐに向き合うことができれば、不安よりも少したくさんの期待に出会える場所をつくることができるかも知れません。

銅金裕司　メディアアーティスト

私の試みは、ガーデンシアターというワークショップを通じて、作品を制作する精神やそこで沸き起こる創造性をみんなで共感し、育て、少し洞察してみることです。この作業自身はアートであると言えそうですが、結果としての作品がすべてアートだとは言えないように思います。そこで、各人の作品が個別なアートを達成してゆくことを目標にします。アートミーツケア、というには、ケアに出会う前のアート自身がどのようなものか？未だここに終始しており、ケアにたどり着けるかは甚だ心もとないものです。

鳥海直美　千里金蘭大学 人間社会学部 人間社会学科

ケアの社会化を推し進めていくことが要請される一方で、ケアされる者とケアする者の関係性のあり方が問われている。生活場面で延々と反復されるケアという営みは、両者の関係に硬直性をもたらす側面を孕んでいる。ケアを媒介としたそのような関係に、生きることの苦悩や偶有性に慄く局面から編み出されるアートが交差したとき、両者の苦悩がリアリティをもって呼応し、ケア役割に束縛された表層的な関係性が解体される。そこから再構築されるケア関係のあり方を紡いていきたい。

畑 祥雄
関西学院大学総合政策学部教授／写真家／
彩都IMI大学院スクール総合監督

「アートの力」

地球上に存在しない新しい何かを創ることがアートの力であり、その意識の高揚時には身体の奥から生きる力が湧き上がることがあります。物真似ではなく誰もが持つ創造力は芸術家の特権ではなく、すべての人に具わった才能です。ただ、多くの人はこの才能を使わず潜在化したままであり、何歳でも少しのトレーニングで顕在化させることができることを知らされていません。現在のアートの世界は天才を探すのではなくすべての人が創造力を活かすことをめざしています。アートミーツケア学会は各自の創造力を交易させる開かれた出会いの場になることをめざします。

播磨靖夫　財団法人たんぽぽの家理事長

現代の社会では多くの人が生きにくさを感じながら生きている。このような関わりこそが求められる時代において、「アート」と「ケア」は重要な意味をもっている。アートが芸術の意味を超え、人の生きることに触れるとき、人はかかわりのなかで人生の深まりや豊かさに気づくことができるだろう。アートとケアが出会うときに生まれる「出来事」を社会に結びつけていくことが本学会の使命であり、その積み重ねを通して社会を変え、新しい公共をつくっていきたい。

本間直樹　大阪大学講師

「学会」と呼ばれるものにはときとしてウンザリさせられますが、ときに面白い学会に出会うことも確かです。そうした学会はもてなし／ホスピタリティを大切にしています。私たちの感性をよくも悪くも引っ掻き回してくれるアートは、思いもよらない後方から私たちをもてなしてくれるでしょう。ホスピタブルかつアートフルな学会のかたちを模索しましょう！

的場政樹　袋田病院院長、精神科医

安彦講平さんの地道な実践で、ようやく芸術療法や単なるリクリエーションとは異なる精神科病院・精神科医療における造形活動の意義が注目を浴びるようになりましたが、それでも他の障害分野に比べるとまだまだ遅れています。今後、本学会が、精神障碍を持つ方々の人生や精神医療福祉関係者の実践がより深く豊かになるような意義ある活動の場となることを期待しています。

三宅美博　東京工業大学助教授

私は高齢者の歩行介助システムの開発を進めておりますが、身体の共鳴とこころの共鳴、その両者を介して実現される出会いに注目しております。誰かを「助ける」のでもなく「助けられる」のでもない。むしろ、そのような出会いを通してはじめて実現される、共に「助かる」という形の介助を目標にしています。その意味でも、本アートミーツケア学会の場に参加できることを貴重な機会と受け止めております。学会設立おめでとうございます。

森口ゆたか　造形作家・NPO法人アーツプロジェクト代表

1999年にイギリスで開催されたアートとヘルスケアの世界的規模でのシンポジウムは、それまで自分の作品と向き合うことが全てであった私に大きく目を開かせ、アートの限りない可能性を指し示してくれた。アートミーツケア学会は、更にテクノロジーまでを範疇に入れたスケールの大きい学会である。異分野の人達が集まり意見交換することは、それぞれの分野に新風や実りをもたらすであろうし、新しい文化領域の生成に期待し、力をつくしたい。

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまの賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業

1.大会の開催

講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2.調査研究の推進

「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、テーマごとに研究部会を設け、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3.学会誌の発行

アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を年1回発行します。

4.ニュースレターの発行

日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを年に4回発行します。

5.フォーラム、シンポジウムの開催

特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6.プログラムの開発、プロジェクトの実施

ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7.国際交流の推進

アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施しアートとケアに関する国際的なネットワークの形成をめざします。

学会の特徴

・理論と実践、研究と現場の往還をすすめ、人間の生きる技術としてのアートの新しい可能性を社会に提案します。

・医療、福祉、教育、コミュニティなどの人間の生を支えるケアの現場にアートを持ち込むことを推進し、ケアの質の向上をめざします。

・医療、看護、福祉、心理、教育、アート、デザイン、建築、園芸、工学、情報など人文、社会、自然科学の分野を超えて学際的な研究を推進します。

・人間のヘルスケアとアートの関わりを考えることを通して、人が生きやすい社会システム、文化について探求します。

・所属、分野を問わず、研究者、実践者、学生の枠をこえ、アートとヘルスケアの関わりについて関心をもち、新しいアート、ケアのあり方について関心のある人、ケアの文化を提案していく意思をもつ人を歓迎します。

年会費

個人会員 一般10,000円／学生5,000円

賛助会員 30,000円(一口)

会員特典

・大会へ参加できます。

・学会が主催するフォーラムやワークショップ、研究会などに会員料金で参加できます。

・学会誌への論文掲載の機会があります。

・学会誌、ニュースレターが配布されます。

・学会のネットワークを通じて、情報を入手し、交流や研究の場が提供されます。

入会申込方法

1.郵便振替、または銀行振込で年会費をご入金ください。

[入金先]

アートミーツケア学会

郵便振替 00920-4-252135

銀行振込(準備中)

2.入会申込書に必要事項をご記入のうえ、年会費の払込票(コピー可)を添えて事務局までお送りください。

3.事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

お問合せ

アートミーツケア学会事務局

〒630-8044

奈良市六条西3-25-4　財団法人たんぽぽの家内

TEL.0742-43-7055 FAX.0742-49-5501

E-mail.art-care@popo.or.jp

2006年3月11日発行